



これまでの登山・労山…そしてアルパ インクライミングのことなど No.3

ハンチントン西壁 1976年6月24日登頂
大阪府勤労者山岳連盟隊
撮影・提供・織田博志

くすのき山遊会 織田博志

総合力の必要な冬季登攀を体験する

私は70年代から30年間、集中して冬季登攀を続けました。その中で穂高の冬壁を1本登ることが、とても易しく感じる体験を初期にしました。

72年2月に中央アルプス西面での継続登攀が貴重な山行になりました。大阪山窓会の一つ年上の二宮さんとザイルを結びあい登攀した大崩谷から長駈、宝剣岳極楽尾根右稜、木曾駒が岳山頂を2度通過し上松尾根を下った山行です。上松液から入下山とも歩いた4ビバークによる山行でした。二人で深い苦しいラッセルを続け、雪崩の脅威に恐怖し、風雪寒気に耐えた登攀でした。忍耐と体力、何といたってもルートファインディングが試されました。翌年3月にも赤沢山南壁槍沢側大スラブ冬季初登～奥

壁から山頂を越えて西岳。東鎌尾根に出て槍が岳經由新穂高へ下りました。関西岳人クラブの一つ年上、砂子さんと凍稜会、平岡さんとザイルを結びあい登りました。横尾から深いラッセルに喘ぎ岩壁基部には雪洞を作りビバークしました。飛騨沢の下降では、硬い雪面にアイゼンの砕く破片が雪煙となり舞いました。この二つの山行では総合力を試されました。私はこの頃、穂高の屏風岩、笠が岳の衛星峰、錫杖岳烏帽子岩前衛フェースを冬季登攀の道場として通っていました。冬壁1本の登攀では得る事ができない充実感を味わうと共にアルパインクライマーとして一段ステップを上がったと思いました。

困難でタフネスな冬季登攀を続ける

私たち凍稜会で計画した冬合宿でも同じように練成しました。75年正月の北穂高岳滝谷合宿は新人合宿を槍が岳中崎尾根で行いました。新人の二人を下山させ中堅は涸沢岳北西稜を四人で、私と鈴木さんは、ザイルを結びあい滝谷末端から第4尾根から北穂高岳山頂を目指しました。順調に合流し、滝谷合宿が始まりました。私はこの時、5ルートに登り、後輩達も3～4ルート登ることだできました。1月9日猛吹雪の中、涸沢岳西尾根を下りました。全員、顔面に凍傷を負っていましたが、何故か笑顔で充ち足りていました。長かった合宿を無事終えて、新穂高では宿泊、温泉そして盛大な酒宴となりました。後、77年にフー南壁、クルト北壁、ベルト北壁などを登攀した後輩の門崎さんも参加していました。その時のザイルを結びあった橋本さんは今も兵庫労山で夫妻で登っています。橋本さんとは秋に明星山南壁で登攀、フランケのルート開拓、谷川岳一ノ倉沢や幽ノ沢の登攀山行2週間を共に過ごし、登山指導センターの竹本さんとキノコ採りに興じた思い

出があります。

私は穂高屏風岩は、前穂高岳北尾根の末端壁という認識でした。4峰壁、前穂高岳東壁との継続登攀を四季を通して行なっていました。79年正月には屏風岩東壁ルンゼをアプローチに北尾根4峰東南壁清水RCCダイレクトルートの冬季登攀に成功しました。4峰頭へ着いたのが夜中の2時、遠く街の灯りが輝いていました。この1日の好天を利用してと思い寝ずに前穂高岳を越え、吊尾根、奥穂高岳、白出のコルと長駈しました。長い1日でした。翌日からの猛吹雪で滝谷へは向かわず涸沢岳西尾根を下りました。この時、ザイルを結びあった原さんとはアラスカ、キチャトナ山群、ポラックスバイヤー東壁(25PED)を初登攀しました。同じく二階さんは、81年日本ヒマラヤ協会隊カンチェンジュンガ峰へ行きました。今、沖縄で暮らしています。後輩たちも次々と海外登山へと出かけ、経験の蓄積ができてきました。私は後輩たちにバトンを渡し、新たな世界へ出て行こうと思いました。私の凍稜会は31歳で代表を退いた時に終わりました。